

枕草子「かにひの花」考



茶花によく使われる花
ガーデンライフ別冊 『日本の花』
昭和39年10月30日発行 誠文堂新光社

長
谷
川
幸
子

くつたさしきしゆきうけをふかしのまのま
あつねとまのたしきしゆきうけとま
あつねとまのたしきうけとま

能因所持本『能因本枕草子』 松尾聰編 学習院大学蔵 笠間書院刊

あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま

前田家本『枕草子』 前田育徳會 尊經閣文庫蔵 尊經閣叢刊丁卯歲配本

あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま

堺本『堺本枕草子』 田中重太郎編 編者蔵 笠間書院刊

あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま
あつねとまのたしきうけとま

序

古典植物に興味を持ち、これらを収集・栽培・観察しているうちに、ナデシコ科センノウ属ガンピの類が加わり、種子からも代を重ねて十数年を過ごした。この目前の現実の花が、幻の「かにひの花」と考えられる。

従来、清少納言『枕草子』の「草の花は」の段の「かにひの花」の解釈には諸説がある。

一 雁皮^{ガンピ}

ジンチヨウゲ科 ガンピ属

学名 *Wikstroemia sikokiana*

日本の山中に自生する落葉低木

黄色の花

二 芫花^{フシモトキ} (藤擬) 一名 サツマフジ

ジンチヨウゲ科 ジンチヨウゲ属

学名 *Daphne genkwa*

九州に自生する中国原産の落葉低木

紫色の花

三 ガンピ

ナデシコ科 センノウ属

学名 *Lychnis coronata*

中国原産の多年生草本

朱色・白色・絞りの花

四 岩藤^{イワフジ} (ニワフジ)

マメ科 コマツナギ属

学名 *Indigofera decora*

日本の川岸等に自生する落葉低木

紫紅色・白色の花

この中のナデシコ科センノウ属ガンピこそが美的直観から最もふさわしく思われ、国文学をはじめ、植物学・園芸学・本草学・美術史・華道史・茶道史・文化史・古記録・各種辞典・事典類を検索し確信を得たので、ここに書きとどめたい。

「かにひの花」の解釈が諸説に分かれたのは、転写の作業から次々に誤りを生じて現在に至ったものと考えられるので、解明に至る経路をより明確にするため、後日、収集した影印本をはじめ、図鑑・図譜・図絵等を含めた資料をすべてコピー形式で、次代に提供したいと思っている。今回は発表形式の制約内での小考とした。

本文

枕草子の「草の花は」の段は、多少異同があるものの次のように

書かれている(傍線 長谷川)。以下全引用文の字体は原典の表記に従った。

1 三巻本

草の花は までしこ。唐のはさらなり。大和のもいとめでたし。をみなへし。桔梗。あさがほ。かるかや。菊。壺すみれ。龍膽は、枝さしなどもむつかしけれど、こと花どものみな霜枯れたるに、いとほやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。また、わざととりたてて人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名もうたてあなる。雁の來る花とぞ文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり。——後略——(池田龜鑑 岸上慎二校注 『枕草子』日本古典文学大系 岩波書店)

2 伝能因所持本

草の花は までしこ。唐のはさらなり。大和もめでたし。女郎花。桔梗。菊のところどころうつろひたる。刈萱・竜胆・枝さしなどむつかしげなれど、こと花はみな霜枯れたれど、いと花やかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。

わざととり立てて人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花、らうたげなり。名ぞうたてげなる。かりのくる花と文字には書きたる。かるひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしきなり。——後略——(田中重太郎著

3 前田家本

草の花は

なてしこからのさらなりやまとのもいとめでたし をみなへしき、やう あさかほきくつほすみれ かるかや りんとうはえたさしなとむつかしげなれとこと花ともみなしもかれたるにいとほやかなる色あひにてさしいてたるいとおかし

わざととりたて、人めかすへうはあらぬはなのさまなれとかまつかのはならうたげなり名ぞうたてある

かむひのはなかりのくるはなとそふみにはかいたる色はこからねと藤の花にて春秋とさくかおかしきなり——後略——(昭和二十年一月二十日發行尊經閣叢刊丁卯歲配本 公益育徳財團の翻刻部分による)

4 堺本

① 草の花は までしこ。からのさらなり。やまのもいとをかし。ききやう。あさがほ。かるかや。きく。つほすみれ。りんどうは、えだざしなどぞむつかしげなれど、こと花のみな霜枯れたるなかより、いとほやかなる色あひにてさしいでたる、いとをかし。又わざととりたてて人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花、らうたげなり。名もうたてある。かりのくる花とぞもじには書きたる。かむひの花、色は濃からねど、藤の花にいと

よく似て、春と秋と二ど咲く、いとをかし。——後略——(田中重太郎著『枕冊子全注釈』日本古典評釈叢書 角川書店の「校異による」)

② 草のはなは、なでしこ。からのさらなり。やまとの、いとをかし。ききやう。あさがほ。かるかや。きく。つぼすみれ。

りんどうは、ゑだざしなどぞむつかしげなれど、こと花のみなしもがれたるなかり、いとはなやかなるいろあひにてさしいでたる、いとをかし。

また、わざととりたてて、人めかすべうもあらぬさまなれど、かまつかのはな、らうたけてなりどもうたてある。かりのくる花とぞ、もじにはかきたる。がむひの花、いろはこからねど、ふぢの花にいとよくにて、春秋と二どさく、いとおかし。——後略——

(速水博司著『堺本枕草子評釈』本文・校異・評釈・現代語訳・語彙索引 有朋堂)

③ 「がむひの花」と解説される(長谷川)。(田中重太郎編『清少

納言枕草子』上 II 『堺本枕草子』上 編者蔵 笠間書院刊)

ここに清少納言が「草の名は」として選び、採り上げた「かにひの花」(三巻本)については、従来種々の説がなされているが、正しく解明されたとは言えない。この小考で明確にしたい。

解釈の諸相

「かにひの花」の解釈は、諸本で次のようになされている。

『枕草子春曙抄』上 北村季吟著 古註釋集成3 新典社刊行

かにひの花 古今の物ノ名にあり。雁緋也よのつねのがんひは藤にも似ず春秋にもさかず。但異本にかかるひの花とあり是は雁緋にはあらで別の物にや

『千草の根ざし』殿村常久(『枕冊子全注釈』 田中重太郎 日本古典評釈叢書 角川書店)

素本活板本又一本などにはかるひの花とあり。こは誤なるべくおもはるれば輪池翁ノ古写本抄ノ本旁注ノ本春曙抄ノ本などにかにひの花とあるによれり。宸翰本にはかむひの花とあり。同じことなり。むをにといへる例多くあり。○拾遺集物名にかにひの花伊勢 わたつ海のおきなかにひのはなれいで、もゆを見ゆるはあまのいさりか古今六帖にかにひかたをかにひのはるくと見えずるはこのもかのもにたれかつけ、むとあり。さてかにひの花は抄に今の世も岩藤とて人の愛する草花なりと見え旁注にも今の世に岩ふぢといふと見えたれどいかゞなり。こは春曙抄に雁緋ガンビなりとある如くにてまことに今世が**ん**びといへる花なるべし。但し同抄によのつねの**が**んびは藤にも似ず春秋にもさかず云といえるは

くはしく考へざるなり。今イマ按オモウにまづこの花イマ今世イマ春マさくを剪ガ春ン羅ビといひ秋アキさくを剪セ秋シユ羅ウといひてもと同オトシラケ類レの花ハナにてそのさまいささかのかはりあるのみこそあれ大かたは同じくてもに葉は桔梗キキョウなどの葉よりは少し大オホきくスてきれこみなき葉ハ茎カのこなたかなたに向ムカひつきて花ハナは石竹セキチクに似ニたる花ハナ咲サくいとツマおかしき花ハナなるをもとは春ハルさくをも秋アキさくをもとにかにひの花ハナとぞいひけむ。花の色は黄紅
色あるひは白き赤ありて今世ことに人のカレ賞カ詠カ花ハナなればさまざま品類あるなり。故コ春ハルと秋アキとさくツマおかしげなりとはいへるなり。さて藤花フジに似ニたりとはたがへる如ごとくなれど藤花フジはもと古本コホンにふしの花ハナとありけむを假カ名ナをたがへてふと藤フジとうつしたがへしよりつぎつぎに誤あやり来きりてつひには諸本モト藤花フジの花ハナとはなりぬるなるべし。さてふしの花ハナといふものは外の古ふるきものには見えねど貝原カイ氏の大和本オホ草クサに頭書カビに和品ワヒンとありてふしガ剪セ春シユ羅ウ剪セ秋シユ羅ウの別種ベツシュなり。葉ハ剪セ秋シユ羅ウに似ニたり。葉ハは缺ケ刻コなし。毎マ節セツより小枝コエダ出でて花ハナさく剪ガ春シユ羅ウにまされり。赤アカふし白シロふしあり。葉ハは同どうしとあるものなり。また地錦抄チキンセウといへるもののがんびの類るいをあげたる中に黒節クロフシ桜節サクラフシ紫ムラサキ節セツ抜節ヌケフシなどといふ類見るいえたり。また和漢三才図会ワカンサンサイズイカイに按逢坂草アヒノサカクサ高七タカシチ八寸ハチサウ葉ハ似ニ二眼ニガン皮ヒ草クサ葉ハ一イチ五ゴ六ロク月ゲツ開キレ花ハナ亦モト似ニ二眼ニガン皮ヒ草クサ花ハナ形カタチ一イチ有アル二白ニハク紅ベニ浅紅センベニ之ノ数品スウヒン一イチ但タ萼ハク茎カ弱ヨク長チカ茎カ節セツ帯オビレ黒クロ故コ又マタ名ナ二節ニセツ黒クロ一イチ遠州エンシュウ新坂多ニイサカタ有アルレ之ノとあるも同じものをいへるなるべし。

『枕草子評釋』金子元臣著 明治書院

口釋 かにひの花、これは色は濃くはないが、藤の花に大層よく

似て、春と秋とに咲くのが面白さうである。

釋 ○かにひの花 「かにひ」は岩ガン菲ヒの音か。岩ガン菲ヒは仙翁センウ花ハナのこにて、春ハルさくを剪セ春シユ羅ウ、秋アキさくを剪セ秋シユ羅ウといふ。花ハナに白紅ハクベニ黄ワウ等トウの色あり。○藤フジの花ハナといとよく似て 花ハナの藤色フジイロに似たるは、今の岩イハ菲ヒになし。又花形ハナガタは石竹セキチクに似たればそれにもあらず。尙考ナカふべし。

『枕草子』池田龜鑑二校注 日本古典文学大系 岩波書店

頭注 かにひの花 岩イハ菲ヒ(びがん)の転かという。仙翁センウ花ハナ。春ハル咲サきと秋アキ咲サきとあるが藤フジの花ハナには似ていない。一説に「藤フジ」は「ふし」(がんび)の誤りかとする。

『校本枕草子』田中重太郎著 古典文庫 平安文学叢刊

校異 三卷本 さくー伊イさく

『枕草子全注釈』田中重太郎 日本古典評釈叢書 角川書店

通釈 「かるひの花」は、色は濃くないが、藤フジの花ハナにたいへんよく似ていて、(これは)春ハルと秋アキと(一年に二回)に咲くのが興趣深いのである。

語釈 ○かるひの花 「校異」参照。三卷本には「かにひの花」、前田本、堺本には「かむひの花」とある。岩イハ菲ヒは仙翁センウ花ハナで、春ハル咲サくのを剪ガ春シユ羅ウ、秋アキ咲サくのを剪セ秋シユ羅ウといひ、石竹セキチクの花ハナに似ているが、藤フジの花ハナには似ていない。殿村常久は「かにひの花」の本文を採り、「藤フジ」は「ふし」(葉は剪ガ秋シユ羅ウに似て、切れこみがない)だとい

うが、どうであろうか。「補説」参照。

補説 「殿村常久の紹介と『千草の根ざし』が引用されているが、「ふちの花」とあり、挿図(62「上」〈右より〉かこひ・ふし・ゆふがほ、)とある「かこひ」の「こ」は、「尔」の草体ではないだろうか(長谷川)。

『枕草子解環』二 萩谷朴著 同朋舎

口訳 雁緋の花。色はそれほど濃くないが、藤の花に随分よく似ていて、春秋二度に咲くのが、面白いのだ。

問題点 かにひの花(各系統間の本文異同) (a)三巻本・流布本
かにひの花 (b)能因本Ⅱかるひの花 (c)堺本Ⅱかむひの花 (d)
前田本Ⅱナシ

能因本(b)本文は、「に(字母尔)」から「る(字母留)」への字形相似による転化本文であり、流布本は三巻本によってその語謬を修正している。堺本と三巻本とは、m音とn音との相違で問題はない。前田本は、これを難解として除去したのであるうか。

『古今六帖』巻六に二首見える「かにひ」の歌は、いずれも隠題の物名歌で、その植物としての属性を知る手がかりとはならない。『和名抄』にもこれは載録されていない。

さて、セキチク科のガンピ(剪春羅。剪夏羅とも)は五〜六月頃、径五センチメートルの黄赤色五弁の花を開き、センノウ(剪秋羅)は七〜八月頃、直径約四センチメートルの深紅色、時に白

色五弁の花を開く。殿村常久の『千草の根ざし』は、剪春羅と剪秋羅とを一括して「かにひの花」といい、その花期の春と秋とを併せて「春秋と咲くがをかしきなり」といったものと解説しているが、何分にも、その花は、ナデシコやセキチクに似て大きく、「藤の花といとよく似て」という叙述とは、形態・色彩共に妥当しない。

そこで集成は、ジンチョウゲ科ガンピ(雁皮。製紙原料とする)からの縁で、ジンチョウゲ科のフジモドキ(堯花、丁字桜とも)であろうかと提案した。ジンチョウゲ科のガンピは、初夏に黄色の小花を頭状花序につけるが、色彩の点で、「藤の花といとよく似て」とはいえない。これに対して同じジンチョウゲ科のフジモドキは、樹形・葉(対生、ガンピの互生とやや異なる)・花房ともにガンピに類して、更に総状の花は藤に近く、花の色も、フジモドキと呼ばれるだけあって、藤紫色である点、ガンピよりも一層妥当性が強い。ただ、花期は春四月であるが、秋季にも返り咲きをすることが考えられるので「春秋と咲く」と言っても、必ずしも不当ではないと思われる。

要するに、清少納言の意識を辿るならば、まずガンピという名によって、セキチク科の春に咲く剪春羅と秋に咲く剪秋羅とから「春秋と咲く」という観念が構成され、ジンチョウゲ科の同名のガンピからフジモドキを連想して、次いでその藤の花に似た紫色

の小花を随想することになったものかと思われるのである。

『枕草子』 増田繁夫校注 和泉古典叢書1 和泉書院

頭注 かにひの花 ナデシコ科センノウ属のオグラセンノウの類。

仙翁花。「わたつうみの沖なかに日の離れ出でて燃ゆと見ゆるはあまのいさり火」(古今六帖六・かにひ)。この歌からしても花は紅色で、花には似ない。漢名、剪春羅、また剪紅紗花(本草綱目)とあるものが、わが国で「かにひ」「がんび」と呼ばれたのである。製紙原料の雁皮は低木でジンチョウゲ科。堺本「かむひ(雁皮)の花」。

『枕草子・徒然草の花』花ごよみ図譜10 文/松田修 国際情報社 かにひ

このカニヒの花について、塩田良平氏は『枕草子評釈』の中で「岩菲(ガンピ・仙翁花)の音写かという。ただし藤の花に似ないので再考を要する。ほかに莞菲(丁字桜)とする説などがある」と頭注している。日本古典文学大系の『枕草子』は「岩菲(がんび)の転かという。仙翁花。春咲きと秋咲きとあるが藤の花には似ていない。一説に『藤』は『ふし』(がんび)の誤りかとする」と同じような解説をしているが、これらは古注によったもので、第一に「岩菲、仙翁花」とあるのが誤りである。ガンピとセンノウゲ(一名センノウ)は、同じナデシコ科のものでよく似ているが、両者は異なる植物である。すなわちガンピは五、六

月に花が咲いて花色は黄赤色、センノウは花は七、八月頃に咲いて花色は普通深紅色、時に白色もある。しかし昔はこの両者は同物と考えられていたらしく『重修本草綱目啓蒙』などにも「剪春羅 マツモト 石竹花に似て大にして深紅色、又浅紅、白色、黄色間色等の二十余品あり、一種花後れて開く者を剪夏羅と云ふ。和名ガンピ」とある。

そこでこれを考証すると、結論から枕草子のカニヒの花は、まさしく今名ガンピを指しているもの如く考えられる。すなわちカニヒは「蟹緋」で、この花の蟹のような赤さを意味し、今名ガンピはカニヒの転化かと考えられる。それは、佐賀県の名産「蟹潰」は、蟹をつきくだいて塩潰にしたものであるが、これをカニツケと言わずガンツケと呼んでいるのをみてもわかる。

また「草の花は」(六七段)に、藤の花とよく似て、春秋と咲くとあるのは、この花色が藤の花とよく似ているという意味で、春秋と咲くという意味である。このガンピは変種や品種が多く、花色も多く、春咲き、秋咲きもあることから、枕草子に現れているカニヒの花は、今名ガンピを指していると考えられる。

考 証

考証① 「かにひの花」は「草の花」である。

「雁皮」「芫花」共に木本であり、「岩藤」は低木性草本ともあるが、木本である。「草の花は」の段に、現在の植物学では木本である藤・山吹・萩・しもつけなどがあり、『徒然草』「草は」にも藤・山吹・萩はあり、『古事類苑』植物部「草」にも藤・山吹などがあるが、これら優雅な姿の植物は、植栽上も草として配した方が美しい。しかし、「雁皮」や「芫花」は、形状が草とはいえない。

考証② 「草の花は なでしこ」

草の花は、まず、なでしこで始まり、「からはさらなり、大和のもめでたし」と、なでしこを礼讃している。優美ななでしこの類は、王朝貴族趣味の美しい花として愛でられ、万葉時代に渡来した梅が万葉集に多く詠まれたように、当時渡来した「かにひの花」も興味ある花であったと思われる。「かにひの花」もナデシコ科の植物であり、清少納言の美意識に叶った花であったに違いない。

考証③ 二種の「かにひ」

現在、ジンチョウゲ科の「ガンピ」とナデシコ科の「ガンピ」があるが、古くも、この二種は「かにひ」で、同じように転化し、混同されながら現在に至ったと考えるはどうであろうか。

『大言海』 大槻文彦著 富山房

かにひ(名)「芫花」蕘花カミヒ「紙斐ノ轉カト云フ、(蜷)にな。蕘ミナ

ら。正身サウシニ さうぢみ) 薄様色目(栗原信充) 跋「今之雁皮紙、古所レ謂斐紙也、單言レ斐、不レ便ニ稱呼一、俗以爲ニ紙斐一、訛爲ニ雁皮一(文藝類纂、七、文具) かうぞ(楮) モ、紙麻ノ音便ナリ) 灌木ノ名。芫花フチモトキ、蕘花キコガシヒノ總名。皮ニテ紙ヲ造ルヲ、斐紙ト云フ、今云フ、雁皮紙ナリ。がんびノ條ヲ見ヨ。醫心方、一四五「芫花、加爾比」枕草子、三、三十六段、草の花「かにひノ花、色ハ濃カラネド、藤ノ花ニイトヨク似テ、春ト秋ト咲ク、ヨカシゲナリ」(ふぢもどきの名ニ合フ)

『岩波古語辞典』大野晋 佐竹昭宏 前田金五郎 編 岩波書店

かにひ「芫花」 草花の一。今のフジモドキかという。「一」の花色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり」(枕六七)

『日本国語大辞典』第三卷 小学館

かにひ(名) 古来ジンチョウゲ科の落葉低木雁皮(がんび)の類に当てるが未詳。また、一説にはナデシコ科の多年草岩菲(がんび)ともいう。*伊勢集「かにひの花につけて 花のいろのこきを見すとてこきたるをおろかに人はおもふらんやぞ」*枕一六七・草の花は「かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり」*文藝類纂(榊原芳野編)七「かにひ 名称、がんび かみのき 近江」補注「堺本枕一九」には「がんびのはな」とある。発音「ア史」鎌倉〇〇〇

『草木辞苑』 木村陽二郎監修 柏書房

かにひ〔莞花・雁皮〕カニヒ 未詳（雁皮または藤擬の各古名に比定する説あり）

〔註〕一説に「かには」「かにひ」「かんば」「かば」は同源で、樹皮もしくは有用樹皮の称と↓かには・かばのき・がんび・ふぢもどき

『和漢三才圖會』下 寺島良安編 東京美術刊

〔莞花〕〔莞花〕

『倭名類聚鈔』 源順著 顧問 井上通泰 山田孝雄 新村出 正宗敦編纂 風間書房刊

〔莞花〕本草云莞花 上音曉和名 波末仁禮 「莞」唐韻云莞 音完一音丸漢語抄云於保井 可以

爲席者也

『最新園芸大辞典』 誠文堂新光社

「フジモドキ」莞花

『枕草子解環』二 萩谷朴著 同朋舎

〔莞花〕

『草木辞苑』 木村陽二郎監修 柏書房

「がんび」〔雁皮〕 〔典〕近松（姫山姥）

『近松浄瑠璃集』下 日本古典文学大系 岩波書店

「姫山姥」とうろうの段 「鴈皮」 頭注 じんちようげ科の落

葉灌木。↓補注 補注 大和本草、七、花草「剪春羅」花四月に

開く。色黄紅なり。又白花あり。又色々あり。花の端人力にて剪たるつくり花の如し。和漢三才図會、九十四、湿草類「眼皮花がんび」△按、眼皮草、与「剪羅」一類異種也。春生、苗、柔カナル莖、青緑ノ葉、厚クシテ於剪羅ヨリ、而不レ。未尖リ、六七月開レ花。似「剪羅」花ニ而刻齒淺ク、其色肉赤也。正本「がんび」。節用集（延宝）「鴈皮（本草）名「剪春羅」。同（享保）「鴈緋 本名ハ剪紅紗ノ花○今按ニ、本名ハ為ニ剪春羅ト者ハ謬レリ。宜レ考（本草）」。

このほか、国語辞典をはじめ各種辞典・事典類に両「ガンピ」の混同がみられる。利用度の高いと思われる『牧野新日本植物図鑑』のジンチョウゲ科「ガンピ」だけに「カニヒ」ガンピの古名」とあるので、多く引用されているのかも知れない。最近の国語辞典からは「カニヒ」は消える傾向にあり、古語辞典に記載されている。ジンチョウゲ科の雁皮は、製紙原料であり、ナデシコ科のガンピは薬草として、両者とも有用な植物であった。

考証④ 「かにひの花」が正しい

本文に「かにひ」「かるひ」「かむひ」「がむひ」などの異同があるが、転写の際の読み違い、聞き違い、思い違い、写し違いなどの誤りが考えられる。「かるひ」の「る」は、「尔」の草体との字形の類似、「かむひ」の「む」は「む」から「ん」への移行期とすれば、

同義と考えられる。前田家本の「かむひのはなかりのくるはなとそふみにはかいたる」は他本では前節とされる「雁の来る花」との関連が窺われ、古本に「かにひ」の「に」が「耳」の草体であったとすれば、字形の類似から「かりひ（雁ひ）」ともなり「雁ひ」ともなる。このようなことから「雁皮」説が生まれたとも考え得るのではなかるうか。「かにひの花」「かにひ」の表記は、『枕草子』以前の平安時代の作品に次の記録があり、これらの古典への連想や賞讃をも含めた表現であったと考えられる。

かにひのはな

伊勢

渡つ海の沖中に日の離れ出てもゆとみゆるは蟹の漁りか（国歌大観 歌集 拾遺和歌集巻第七 伊勢 松下大三郎編纂 渡邊文雄 角川書店刊）

かにひの花

渡つみの沖中にひの離れ出て燃と見ゆるは蟹の漁か（續国歌大観 歌集 伊勢集 松下大三郎編纂 角川書店刊）

かにひの花

わたつみのおきなかにひのはなれ出て もゆとみゆるはあまのいさりか（私家集大成 中古1 伊勢Ⅲ 和歌史研究会編 明治書院）

花につけて

花の色の濃きを見すとてきたる身の愚に人は思ふ覧やは（續国歌大観 歌集 伊勢集 松下大三郎編纂 角川書店刊）

歌大観 歌集 伊勢集 松下大三郎編纂 角川書店刊）
かにひの花につけて

花のいろのこきをみすとてきたるを おろかに人はおもふらんやそ（私家集大成 中古1 伊勢Ⅰ 和歌史研究会編 明治書院）

かにひの花につけて

花の色のこきをみすとてきたるを おろかに人はおもふらんやそ（同 伊勢Ⅱ）

花につけて

花の色のこきをみすとてきたるみの をろかに人は思ふらんやは（同 伊勢Ⅲ）

かにひの花につけて

花の色のこきを見すとてきたるを おろかに人は思ふ覧やそ（羣書類従巻第二百七十三 和調部百二十八 家集四十六 伊勢集下 羣書類従・第十五輯 和歌部 続群書類従完成会）

かにび

渡つ海の沖中に火の離れ出て燃と見えしは蟹の漁火
片岡に火の遙々と見えつるは此面彼面に誰か附けむ（續国歌大観 歌集 古今和歌六帖第六 松下大三郎編纂 角川書店刊）

鴈靡花 左持

貫之

片をかにひのはなばなに見えつるはこのもかのもに誰かつけつる

右 友則

わだつみの沖なかにひのはなれいでて燃ゆとみゆるは天つ星かも

(平安歌合大成一 宇多院物名歌合 甲本 萩谷朴 同朋舎)

九番

左 貫之

片をかひのはなれつつみえつるはこのもかのもとに誰かつつけむ

右 友則

わだつみの沖なかにひのはなれいでて燃ゆとみゆるは天つ星かも

(同 乙本)

考証⑤ 朱色の花である

火・漁火・日・星などが詠みこまれた「かにひの花」には輝く朱色の花がふさわしく、花卉の切り込みのある形状は、放つ光を思わせる。『最新園芸大辞典』(誠文堂新光社)によれば「センノウ属の学名リクニスとは、ギリシャ語でランプの意味で、本属中の花が火焰色をなすことに由来する」とある。『春曙抄』の注釈にも「雁緋」とあり、赤い花ではないだろうか。

考証⑥ 「蟹緋の花」ではなかったか

「かにひのはな」の詠みこまれた歌中の「蟹の漁火」から「蟹火」が連想されるが、『大漢和辞典』卷十 諸橋轍次著 修訂版

(大修館書店刊)に「蟹火」クワイ 蟹を捕るかがり火。「白居易、

重題別「東樓」詩)春雨星攢尋「蟹火」、秋風霞颭弄「濤旗」。と

ある。「蟹火の花(渡つ海の向う(中国)から渡来した花)が陸へ上つて「蟹緋の花(片岡にひのはな)」になったとも考えられる。

『枕草子・徒然草の花』花ごよみ図譜 文/松田修(国際情報社)

「かにひ」にも「蟹緋」説があり、色彩の類似があげられているが、中央に深い切れ込みを持つ花卉は蟹の鋏そっくりで、色彩と共に形状からの類似による花名の起源が考えられる。

考証⑦ 古典に基づく「花の色は濃からねど」

「花の色は濃からねど」は、伊勢の「かにひの花につけて 花の色のかきを見すとて 『群書類従』第十五輯 和歌部 伊勢集(続群書類従完成会)」を引いたものと考えられる。

辞典に「こい(濃)——特に紫または紅の色の深いさまをいう」とあり、「濃い色」が美しいとされていたことから、この花のホワイトを含んだ明るい朱色は「濃い色ではないが美しい」という意味とも考えられる。濃淡のある花の中では、濃い色が目立つ。伊勢の「かにひの花につけて」の「かきを見すとてきたるを(群書類従)」から引かれた「濃からねど」の表現であろう。辞典に「こい——草木を根のついたまま引き抜くともいう」とあり、伊勢の「こきたる」「かにひの花」は、「雁皮」や「芫花」の木本ではなく、ナ

デシコ科の草本と考えるのが妥当であろう。

考証⑧ 「ふぢ」・「藤」は「ふし」であろうか

「藤」の本文改竄になるが、長年の疑問が解決されるのではなからうか。『千草の根ざし』説の如くと思われる。もとは筆の運びから「ふ志」ではなく「ふし」と書かれていたと考えれば、字形から藤の長い花房を連想し、何の疑いもなく王朝感覚の紫の藤の花になっってしまったのではなからうか。「ふし」は、センノウ属の「フシグロセンノウ」の一名で、現在も園芸関係者がよく使っている。「ガンピ」の花色は、センノウ属の中で「フシグロセンノウ」に最もよく似ているので、渡来した珍しい花を、日本在来の「ふし」の花にいとよく似て」と紹介したものと考えられる。この「ふし」も、草の花として清少納言が採り上げた花の一つである。

考証⑨ 同じ株が年二回開花する名花である。

平成二年六月二十二日（夏至）晴 最高気温三十四度（横浜気象台）

庭前のナデシコ科センノウ属ガンピが輝きのある朱色の五弁花を開き、蝶が舞う。近隣のカンゾウ・ヒオウギも共に同日開花した。ピワ・ザクロ・ホオヅキ・ノウゼンカズラなど、オレンジ系統の色が美しく感ぜられる季節である。この年は、ホトトギスの声を六月九日の明け方に聞いた。

同年九月一日、炎暑のあと再び花を開く。また、同時期に東京のマンション（神田由美子邸）のペランダでも、鉢植えのガンピが二度目の開花をしたとのことである。（敬称略）

『枕草子』本文に

三卷本 『春秋とさく』 能因本 『春と秋とさく』

前田本 『春秋とさく』 堺本 『春秋と二どさく』

とあるが、この「春秋」については「春」「秋」という季語のほかに「春秋——一箇年『新修漢和大事典』 小柳司氣太著 博文館」の意もあり、早に弱く年に二回開く中国渡来の花を「春秋」・「春秋時代」の歴史を背景に、「春秋」の文字を登場させ、白居易の「重題別二東樓」詩中の「蟹火」「春雨」「秋風」を偲び、花の漢名「剪春羅」「剪秋羅」をも大和ことばで清少納言らしく簡潔にいきったのではなからうか。

現在、この花は、『原色茶花大事典』 監修 塚本洋太郎（淡交社）にも、センノウ属の花が多く採り上げられているように茶席の花として珍重され、学者・文人・画家・茶人・数寄者・植物愛好家達に愛で育てられているが、山草の扱いを受ける気難しい花なので、絶えることも多いらしく、園芸店の店頭で苗の争奪戦が展開される。近代以後、次の作品にもセンノウ属の花が、選ばれた花として採り上げられている。（以下敬称略）

▽和辻哲郎 『枕草紙』に就ての提案』大正十五年四月 『國語』

と國文學』春季特別號(至文堂)

次の作品への影響が考えられる

▽和辻照 〈本郷西片町 私の好きな「がんび」の花が活けてあつた。』『和辻哲郎とともに』(新潮社)

▽芥川龍之介「戯れに(2) 古簾垂れたる窓の上に 鉢の雁皮も花咲かむ」名著 複製『芥川龍之介文学館』澄江堂遺珠 岩波書店版(日本近代文学館)

▽季吟 「から絵もやうつすがんぴの花の色」 『大歳時記』(岩非)(集英社)

▽高浜虚子 「蜘蛛の糸がんびの花をしほりたる」 『花の歳時記』(がんび) 松田修著 現代教養文庫(社会思想社)

▽星野立子 「たまに来る雁緋の花のしじみ蝶」 『右に同じ』

▽知世子 「燃え燃えて岩非はかなし藪の中」 『ジャポニカ』

〔岩非・剪春羅〕(平凡社)

▽白洲正子 「がんび・仙翁町・仙翁寺・仙翁村・仙翁・仙翁花・仙翁の畑・仙翁水」 『草づくし』 白洲正子著〔岩非〕(新潮社)

▽竹村俊則 「仙翁洞―嵯峨鳥居本の東の蔓茶羅山を仙翁寺山ともいい、山上に仙音寺があつた。寺では仙翁花という珍花を栽培していた。」「嵯峨十景―仙翁麦浪」 『都名所図会』上巻 竹村俊

則校注 角川文庫(角川書店)

▽竹村俊則 「蔓陀羅山〓万灯笼山〓仙翁寺山」この山を一名仙翁寺山というのは、山上に仙音寺(仙園寺とも記す)なる寺があつて、訛りによって仙翁寺とも呼ばれたからである。『新撰京都名所圖會』 竹村俊則(平川書院)

▽小倉遊亀 院展出品作『花三題』〔岩非〕 『PHP 9 No. 508』表紙(PHP研究所)

▽深沢紅子 「ふしぐろせんのうち」軽井沢の花総集編 えはがき

▽堀文子 「ふしぐろせんのうち 光琳の香つつみに、目にも鮮やかな朱と緑青のせんのうちの花を描いた名品を、安田鞆彦先生が御所蔵であつた。』『堀文子画文集』(日本交通公社)

▽星野富弘 「ふしぐろせんのうち」『鈴の鳴る道』花の詩画集(偕成社)

▽浜野浩 「マツモトソウ(松本草)」神の植物誌『折々の花』(せんのうち〓仙翁)(八坂書房)

▽伊藤敏子 「仙翁令菓〓仙翁令(敬称)菓(花・華)ではないかと思う」(談) いけばな美術全集八『抛入花と文人花』 『藤掛似水華伝書』釈文(集英社)

▽木村陽二郎 「シーボルト日本植物図譜」は世界で最も美しい図譜の一つであり、日本植物に関するものとしてはその美しさにあつてこれを越えるものはないと思われる。『原色精密日本植物図譜』(シーボルト・フロラ・ヤポニカ)〔ガンプ・センノウ〕

木村陽二郎監修（講談社）

▽奥山春季
奥山和子
原井敏子「ガンピ」ナデシコ科の植物には優しく美しいものが多
いが、ガンピもその最たるものである。
奥山春季
奥山和子
原井敏子改訂増補『茶花
植物図鑑』（主婦の友社）

考証⑩ 古典を探る

「かにひの花」は転写の誤りから、藤の花によく似た正体不明の
花になってしまったと考えられる。しかし、王朝の美を受け継いだ
鎌倉時代の作と伝えられる『奈与竹物語絵巻』日本の絵巻17（中央
公論社）に、蛩飛び交う宮廷の前栽として描かれている夏草の花は、
葉形に疑問があるが、ナデシコ科のガンピの類ではなからうか。

以下「かにひの花」の類の出典を「ガンピの類」即ち「センノウ
属の花」の範囲で検索することにする。

▽『古事類苑』植物部二 植物部十八 草七 神宮司廳藏版（吉川
弘文館刊行）

剪紅羅

〔下學集下草木〕セウノウケ仙翁花嵯峨仙翁寺始出

〔大和本草七花草〕センノウ剪秋羅此華、故云「仙翁華」也、花史二出タリ、曰日カゲを好ミ糞ヲ畏

ル、河水ヲソ、グベシ、樹下ニ宜シ、今世人賞玩シテ品類多ク出
ヅ、花紅ナリ、又白色アリ、褐色アリ、本草剪春羅ノ集解ニ、剪
紗花トイヘル、剪秋羅ナリ、剪春羅と一類ニテ別ナリ、ガンピヨ

リ花マサレリ、毎年土ヲ改テ肥土ニウフベシ、不レ然レバ不レ繁
キエヤスシ、初秋花ナク尤可レ賞、二種共ニ子ヲマクベシ、又梅
雨ノ時、枝ヲ切テサスベシ能活ク、センノウハ嵯峨ノ仙翁寺ヨリ
出タルユヘ名ヅクト云、仙翁寺今ハナシ、花史曰、結レ子収藏來
春下レ種、

フシ。剪春羅剪秋羅ノ別種ナリ、葉剪秋羅ニ似タリ、葉ハ缺刻ナ
シ、毎節ヨリ小枝出テ花サク、剪春羅ニマサレリ、赤フシ白フシ
アリ、葉ハ同ジ、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕剪紅羅 剪春羅 剪秋羅 剪紅紗花 俗
云仙翁花、今云世牟、略○中

按剪紅羅總名而有二數種、皆夏月開レ花、稍遲者至レ秋耳、冬乃
枯死、宿根春生レ苗、故未レ見ニ春冬開レ花、者畫譜説不レ是也、
相傳嵯峨仙翁寺始出レ之、仍名ニ仙翁花、今止略曰レ剪

五鳳集云、吾邦有二種奇花、毎歲以二六七月一著レ紅、謂ニ之仙
翁花、世傳自ニ嵯峨仙翁寺一所レ出也、大唐詩文之中、論レ花甚
夥、未レ聞レ有ニ此名一、

蓋此仙翁花乃剪紅羅花也、疑僧翕然取ニ得種於中國一者矣、仙翁
寺舊地在ニ大覺寺西一今爲ニ村名一、今愛宕山一鳥居東道傍
有二小堂、號ニ仙翁寺、當時所ニ賞
翕一者記ニ于左一、

剪紅羅今云葉形似ニ梅葉一而無ニ鋸齒一、裏有二微白毛一對生、六
七月開レ花正紅色、大如レ錢有ニ刻齒一、周廻如ニ剪成一、今時又

有二白花者一、

剪秋羅^{俗云松本世半} 莖葉與二常剪羅一相似、而五六月開レ花深紅色、其

周廻如二剪成一之處不レ峻、今時有二數色一、紅、白、及裏朱、曙

紅、櫻色等、變ニ於子種一、

剪紅紗^{俗云小倉世半} 葉細長、而五六月開レ花淡紅色、形如二石竹花一、其

刻齒亦深而美、今又有二白花者一、

〔重修本草綱目啓蒙^{十一}照草〕 剪春羅。マツモト。一名春羅^{秘傳} 碎剪

羅^{同上} 剪金羅^{群芳譜} 箭竹^{圃史} 剪裙羅^{同上} 漢宮春^{八閩通志} 劈羅^{花史左編}

剪秋羅一名漢宮秋^{群芳譜} 剪秋紗^{名花譜} 剪金紅^{閩書南} 秋羅^{花史左編} 剪絨

花^{約圃}

マツモトセンノウゲ、略シテマツモトト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ生

ズ、圓莖高サ一二尺叢生ス、葉八千日紅葉ニ似テ兩對ス、四月ノ

始莖頂ニ花ヲ開ク五瓣、石竹花ニ似テ大ニシテ、深紅色又淺紅白

色黃色間色等ノ二十餘品アリ、一種花後レテ開ク者ヲ剪夏羅ト云

フ、和名ガンピ、苗形剪春羅ニ異ナラズ、五月ノ末花ヲ開ク、石

竹花ニ似テ大ナリ、紅黃色又紅白間色等ノ數品アリ、又一種俗ニ

フシト呼ブ者アリ、フシハ黒フシノ略稱ナリト云フ、又節間ニモ

花ヲ生ズル故ニ名クトモ云、一名逢坂サウ、此草モ亦形狀相似テ

節黒ク、葉背モ亦紅紫色ナリ、花ハ色赤シ、又シロフシ、サクラ

フシ、ヌケフシ、ムラサキフシ等ノ品アリ、又一種秋ニ入テ花ヲ

開ク者ヲ剪秋羅ト云フ、俗名センノウケ、古歌ニハ紅梅グサ、ソ

リノハナト云、即集解ニ謂ユル剪紅紗花ナリ、花色紅又白色間色

金黃色等ノ數品アリ、唐山ニハ剪冬羅モアリト、遵生八牋ニ載ス、

和産詳ナラズ、

増、一種ヲグラセンノウト云アリ、草質尋常ノモノヨリ小ニシテ、

葉細長ク花亦小ナリ、數色アリ愛スベシ、

〔地錦抄^{附録二}〕 小倉仙翁花

花形よく小輪、花のまはり切りさきて、なでしこの花のごとく、

花數多く咲、くれなゐと白色の二品あり、葉はほそ長くして、柳

葉のごとく、六月末比開く、此種子延寶年中に渡り、其後中絶し

たるを、又近年見出して植る、

〔剪花翁傳^{三月四月開花}〕 松本仙翁花 花白淡赤み黒紅等也、開花四月

中旬、育方瞿麥に同じ、形瞿麥より大きく和らか也、分株冬巢に

入頃より、春芽出しまでにすべし、

〔剪花翁傳^{三月五月開花}〕 仙翁花 剪秋羅 略してセンともいへり、花

赤、開花五月中旬より八月まで咲、方日向、地三分濕り、土芥埃

土、肥油粕よし、分株正月芽出しまへよし、

〔殿中申次記〕 七月六日

一仙翁花一荷 右京大夫殿 一同 一荷 眞木鳥次郎

七日

一仙翁花一筒 蔭涼軒 一同 三筒 三條殿 一同 一筒 藤

兵衛佐殿 一同 同 細川右馬頭 一同 同 八幡 林坊

〔後深心院關白記〕 永和四年八月三日癸卯、二條宰相來、有二續歌興一、披講之時分、日野大納言來、詠二物名各一首一、せにをうくゑ、宰相書題、庭前有二此花一、今日賞レ之、近來出來花也、尤有レ興、

▽『後深心院關白記』 増補史料大成 愚管記四 竹内理三編（臨川書店）

「永和四年八月三日癸卯、晴 二條宰相來、有^二續歌興一、披講之時分、日野大納言來、詠^二物名各一首一^{せにをうくゑ}、宰相書題、庭前有^二此花一、今日賞レ之、近來出來花也、尤有レ興、愚詠如此しすかすむ里のつ、きそかせにほうくゑかきにそふ梅の一本に（影印本をよむ・傍線 長谷川）

▽「見なおしたいリクニス類」 大河内康男著『新花卉』95（タキイ種苗出版部）

〔後深心院關白記に「仙翁華」を見出すのが嚆矢とされる〕

▽下學集（一四四四） 元和三年板 古辭書叢刊（新生社）

「仙翁」の由来が記されているが、後のシーボルト命名の「リクニス・センノウ」の種名を指すのか、属名即ち「センノウの類」を指すのか不明である。

▽『山科家禮記』第五 史料纂集（群書類従完成会）

〔延徳三年（一四九一）七月七日、晴、壬午〕

一、今朝禁裏予花ニ參候、—中略—御學文所棚花丸花心センノヲ

ケ、押置心松、下菊センノヲケ色々、—中略—下ヒキクセンノヲケ—中略—柱心キ、クセンノヲケ」とあることから、「仙翁花の類」も考えられ、この中に「かにひの花」も含まれていたのではなからうか。

▽『言繼（山科）卿記』第二（國書刊行會）

〔天文二十一年九月二十七日（一五五二）

庭仙翁花一本、賀^{二位}在富所へ遣之、祝着之由候了、〕

▽『池坊專應口傳』（一五四二） 續羣書類従卷第五百五十三遊戯部 三（統群書類従完成会）

「仙翁花などのたぐひ」「十二月に可用也（七月。仙翁花）」「五節句に用べき事（七夕。仙翁花）」「高く立てざる物の事（岸比）」「專祝言に用べき事（仙翁花。岸比。節黒）」とセンノウ属の種名が使い分けられ、「岸比」は「がんひ」と読める。「かにひの花」の「かにひ」の発音は、関西訛りでし易く、関東訛りでし難い。『日本国語大辞典』「かにひ」に〔発音〕〈ア史〉鎌倉○●○○（京ア）○とある。政治・文化の中心の東漸により「がんび」への転化に拍車がかけられたとも考えられる。

▽いけばな美術全集（集英社）

一 『供花と荘嚴』

二 『いけばなの成立』

三 『専好の立花』

四 『立花の大成』

五 『立花の展開』

六 『茶の湯の花』

七 『抛入花と文人花』

八 『生花と流派』

九 『いけばなの風俗』

十 『美術と草花』

この「いけばな美術全集」の中には『祭礼草紙』『江戸年中行事絵巻』『京風俗十二ヵ月図巻』などがあり、祭礼の行列の花傘の上に立てられた仙翁花や、七夕立花会で多くの花瓶にいけられた仙翁花の並ぶ花座敷の有様から、当時の様子を偲ぶことが出来る。また多くの『花伝書』などの中にも、「当季の花」として多彩な表記で記録され、「センノウ属の花」の情報が満載されているが今回は省略する。

▽『生花生傳記』 茶道文庫『茶花』 西堀一三著（河原書店刊）

「六月 がんひ」「七月 仙翁」

▽『山上宗二記』 天正十六年（一五八八）～十八年 『植物と文化』第四号「茶花の研究 — 茶道古典に現われたる茶花 — 森富夫」（八坂書房）

「ガンピ、ウチノナデシコをのぞけば目新しい花もなく」

▽『利休の茶花』 湯川制著（東京堂出版）

「山上宗二も『夏の花』として『芍薬、薄色ノ千葉但、赤ハ無用也、内野撫子、石竹、桔梗、夕顔、白芥子、槿、萩、雁皮、— 後略—」

略—」

▽『日本の文様7蝶』（光琳社出版）

イ 『花卉蝶鳥文文盤』（拓本） 平安時代

ロ 『綸子地蝶花卉文繡裂』 室町時代

ハ 『緋色段替蝶石竹唐織』

ニ 『撫子蝶文唐織』 東京国立博物館

▽『浜松図屏風』 室町時代 東京国立博物館

▽『花鳥図屏風』 狩野宗秋（一五五一—一六〇二）筆 『日本美術』

『花鳥図屏風』 狩野宗秋（一五五一—一六〇二）筆 『日本美術』

▽『草木花写生図巻』 狩野探幽（一六〇二—一七四）筆 東京国立博物館（紫紅社）

博物館（紫紅社）

「センノウ」「せんのうけ」「六月十七日□光院与来」

▽『花鳥画の世界3 『絢爛たる大画』（学習研究社）

イ 『四季花鳥図』 元信もとのぶよう様 室町時代

ロ 『秋冬花鳥図』 狩野永徳（一五四三—一九〇）筆

▽『花鳥画の世界5 『瀟洒な装飾美』（学習研究社）

イ 『四季草花図』 尾形光琳（一六五八—一七二六）筆

「センノウ」

ロ 『センノウ図香包』 尾形光琳筆 安田鞞彦旧蔵

▽『草花図団扇』 尾形光琳筆 『日本美術絵画全集17尾形光琳』
畠山記念館蔵(集英社)

▽『四季草花図屏風』 渡辺始興(一六八三—一七五五)筆 畠山
記念館蔵

▽『夏秋草図屏風』 酒井抱一(一七六一—一八二六)筆 東京国
立博物館蔵

▽『十二月花鳥図』 六月 酒井抱一筆 江戸時代(二八二三)
宮内庁

▽『さむたらかすみ』 葛飾北斎(一七六〇—一八四九)筆 狂歌
絵本 ピーター・モース・コレクション 『北斎美術館』2風景画
(集英社)

▽『釈迦如来誕生会』 近松門左衛門(一六五三—一七二四) 近松

全集第八(岩波書店)

「うき名は何とせんおう花^ケ。あるなあしなの色々^んに。」
浮 爲・仙翁

▽『花壇綱目』(一六六四) 編集兼 発行者香山益彦(京都園藝倶楽部)

▽『花譜』 貝原益軒(一六三〇—一七一四) 『植物と文化』創刊
号(八坂書房)

▽『花壇地錦抄』(一六九五) 伊藤伊兵衛三之丞著 (八坂書房)

▽『増補地錦抄』(一七一〇) 伊藤伊兵衛三之丞著 (八坂書房)

▽『広益地錦抄』(一七一九) 伊藤伊兵衛政武著 (八坂書房)

▽『地錦抄附録』(一七三三) 伊藤伊兵衛政武著 (八坂書房)

▽『絵本野山草』(一七五五) 橘保国著(八坂書房)

▽『薬品手引草』安永七年(一七七八)天保十四年(一八四三)補
刻 東京大学総合図書館蔵

▽『物品識名』(一八〇九) 水谷豊文著 名古屋叢書三編第十九
卷(名古屋市教育局)

▽『泰西本草名疏』(一八二八) 伊藤圭介訳著 名古屋叢書三編
第十九卷(名古屋市教育局)

▽『増訂 草木圖説』草部Ⅱ(一八五六) 飯沼慾齋著述 牧野富太郎再訂増補 (国書刊
行会)

考証① 江戸時代に渡来したという「芫花^{フシモトキ}」

『最新園芸大辞典』(誠文堂新光社)によれば、「渡来、平賀源内
の『物類品隲』 宝暦一三年(一七六五)に記されている。」とあ
り、『園芸大百科事典』(講談社)には「中国長江流域などの原産。
日本には徳川時代に渡来したらしく」とある。また『朝日園芸百
科』にも「中国名を(芫花^{フシモトキ})という。日本には江戸時代初期に渡
来した」とある。

考証② 美しい「センノウ属」の花

1 ガンピ (I. coronata)

これが、「かにひの花」であろう。白花は気品のある白色をし

ている。現在、『中国高等植物图鉴』第一冊（科学出版社）には、「剪夏罗・山茶田」とある。

2 センノウ (L. senno)

実物・写真に出会えず、図絵でしか見たことがない。『見直したいリクニス類』大河内康男著『新花卉』95（タキイ種苗出版部）に「十余年前、本種を国内で入手栽培していたが絶やしてしまい、再度の入手は国内では叶わず、イギリスの山草会からやっと入手したという経験があり、入手しにくい種類である。」とある。『中国高等植物图鉴』では、自生地が異なるが「L. coronata」の中に入っている。又別の本には「剪秋罗 (Lychnis senno)」と記載されている。

3 マツモトセンノウ (L. sieboldii)

「伊呂波松本草四十八種」などもあるように、品種が多い。「マツモト」は人名・地名両論があるが、「松の根もと」の意味をも考えた。『山科家禮記』の「押置心松、下菊センノウヲゲ色々」の如く、『宣阿弥花伝書』（花ふ）天文二十一年（一五五二）
廊坊相伝 廊坊大典氏藏いけばな美術全集二『いけばなの成立』（集英社）にも、心の松の下に赤い花があり、「せきちくを立つべし」「せんわうけなとたつべし」などと書かれている。

昔住んだ九州の海岸の崖で、松虫の鳴く松の根方に河原撫子が咲いた。また、天の橋立中洲の松の根もとで十一月半ばに開花し

ているなでしこを発見し意外であった。わが庭でも「ガンピ」が椿の下のものだけが残ったので、『花譜』にある「樹下日かげにうふべし」がうなずける。

4 フシグロセンノウ (L. niqueiiana)

一名逢坂草、『花壇綱目』に「あふ坂」とある。

5 オグラセンノウ (L. kusiana)

九州の山地にあるとされるが、『植物と文化』第八号（八坂書房）『地錦抄附録』「草木異国より来る年記」伊藤伊兵衛「小倉仙翁ウケ花正保（一五四四—一六四七）に來り。中絶して又享保（一七一六—一七三四）のはじめに來る。」また、『地錦抄附録』（八坂書房）「此種子延宝（一六七三—一六八〇）年中に渡り其後中絶したるを又近年見出して植る」ともあり、国内に潜在していたのか再渡來したのか定かではない。他種の場合もこのようなことが考えられるかも知れない。この小形で優雅な花の名には、小倉山・小倉山莊・小倉百人一首など、仙翁寺にも近い古典にゆかりのある「小倉」かとも考える。

6 エンピセンノウ (L. wilfordii)

燕尾仙翁。小形で花色が鮮明である。

7 センジュガンピ (L. gracillima)

小形で白色である。

8 エゾセンノウ (L. fuldens)

日本の植物図鑑には記載があるものとないものがあり、図はない。『中国高等植物図鑑』（科学出版社）「L. [in]gen」には「大花剪秋羅・剪秋羅」とあり、マツモトセンノウの花形に似た図がある。『原色精密日本植物図譜』シーボルト著・木村陽二郎監修（講談社）「センノウ」によれば、「リクニス・センノウ」とよく似ているようである。実物・写真共に見たことがないが、植生地の違いにより同種異名も考えられるのではなからうか。標本でこの二種の名称の修正がなされているというので確認したいと思っている。

考証⑬ 古人の関心の深さが窺われる表記

「センノウ属の花」と考えられる表記を、文献から拾い上げてみると、時代を反映した言葉遊びや文字遊びともいえそうな豊富な表記で今日に伝えられている。

かにひの花・かるひの花・かむひの花・がむひの花・かなひの花・かんひ・かんび・がんひ・かんび・がんびの類・白がんび・赤がんび・大がんび・さらさがんび・クルマガンピ・眼皮・眼皮
草・岸比・巖緋仙翁・岩栂・岩菲・鴈皮・鴈緋・鴈靡・雁皮・剪春羅・剪夏羅・剪秋羅・剪秋羅・剪紅花・剪紅羅・剪羅花・剪紗花・剪紅紗花・剪紅紗羅・春羅・碎剪羅・剪金羅・翦竹・翦裙羅・漢宮春・劈羅・漢宮秋・剪秋紗・剪金紅・秋羅・剪

羅・剪絨花・碎剪花・剪秋羅・せむおうくゑ・せむほうくゑ・せんをうくゑ・せんおうけ・せんのおうけ・せんおふけ・せんのおうげ・せんをうけ・せんおうげ・せんわうげ・センフウゲ・センノヲケ・センノヲゲ・センノウ・セン・剪・世牟・そりのはな・紅梅草・仙翁・仙翁花・仙翁花・仙翁華・さきわけせんおうけ・くちべにせんをうけ・うこんせんおうけ・白仙翁花・赤仙翁花・緋仙翁花・かき仙翁花・口紅仙翁花・仙応・仙翁令菓・日月花・フシグロセンノウ・フシグロ・フシ・あふ坂・逢坂草・黒節・桜節・抜節・紫節・黒附子・白附子・薄色附子・萩節・マツモトセンノウ・まつもと・まつもとせんをう・松本せんおうげ・白松本・松本剪・松本剪翁花・松本せんのふけ・櫻松本・ぶんど松本・朝鮮松本・折入松本・白八重松本・マツモトソウ・松本草・松本せんおふけ・白松本せんおうけ・八重松本・伊呂波松本草四十八種・オグラセンノウ・おくらせんのふけ・小倉・小倉仙翁花・小倉仙翁花・エンビセンノウ・センジュガンピ・エゾセンノウ

考証⑭ 『枕草子』の美学「をかし」

『枕草子』の「かにひの花」に引かれた友則・伊勢の歌は、前述の如く中国の唐の詩人白居易（白樂天）の次の詩に由来するのではないかと考えられる。

重題別二東樓一

重かさねて題だいして東樓とうろうに別わかる

東樓勝事我偏知。

東樓とうろうの勝事しょうじ我われ偏ひとに知しる、

氣象多隨二昏旦一移。

氣象きしやう多おほく昏旦こんたんに隨したがひて移うつる。

湖卷二衣裳一白重疊。

湖こは衣裳いしやうを卷まきて白重疊はくちゆうじふ、

山張二屏障一緑參差。

山やまは屏障へいしやうを張はりりて緑參差りよくしんし。

海仙樓塔晴方出。

海仙かいせんの樓塔ろうたふは晴はれて方まに出いで、

江女笙簫夜始吹。

江女かうぢよの笙簫しやうせうは夜始よるはじめて吹ふく。

春雨星攢尋レ蟹火。

春雨しゆんう星攢ほしあつまる蟹かにを尋たづぬる火ひ、

秋風霞颭弄レ濤旗。

秋風しゆふう霞かすみが颭なみる濤ろうを弄ろうする旗はた。

宴宜二雲髻新梳後一。

宴えんは雲髻うんけいの新あたらし梳くしる後のちに宣よろし

曲愛二霓裳未レ拍時一。

曲きよくは霓裳げいしやうの未いまだ拍うたさる時ときを愛あいす。

太守三年嘲不レ盡。

太守たうしゆ三年さんねん嘲あざけりて盡つくささず、

郡齋空作百篇詩。

郡齋ぐんさい空むなしく作つくる百篇へんの詩し。

この詩中の「星攢（あつまる）」から天の河（川）・七夕が連想

され、「蟹火」は「カニヒ」となり、点々とした「蟹の漁火」と詠
まれたのであろうか。そしてその後の清少納言はそれらを引きなが
ら更に「春秋」をも引いて表現し、「枕草子」の美学といわれる

「をかし」による最高讃辞で結んだものと考えられる。

考証⑮ 王朝の「かにひの花」か朱を放つ

「仙翁花」が七夕の花に選ばれたのは、古典に彩られたこの季節
の名花を「星」の象徴として見立てて中心に据え、鑑賞されたので
あろう。形状からも花弁に尖った切れ込みのある朱色の花は、あた
かも光を放つようにさえ見え、王朝の雅な「歌合」で「天つ星か
も」と詠みこまれた「かにひの花」は、この時代には「センノウ属
の花」と解釈されて、古典の流れに沿う行事となったものではなから
うか。

清少納言が「草の花」に選び、採り上げた「かにひの花」は、
『枕草子』以後幻の花となり、千年の謎となってしまったが、この
度の検索により、この「センノウ属の花」は、その後の文化の中に
美しく生き続けて、歌に詠まれ、贈答に使われ、大事に育てられて
七夕の花に用意されて献上された美的価値の高い名花であることが
明らかになった。そして現在もなお珍重され続けている花である。

この「ナデシコ科センノウ属ガンピ」こそが「かにひの花」であろう。
この小考は、東洋蘭や山草を育て、茶会の花を依頼されて調達し、
日本画の見地から古典的風情再現のため、とりあわせた古典植物の
露地植えを試みていた環境の裡で凝視し続けて得た一考である。